

正倉院宝物にみる神仙世界 天平人の桃源郷

井口喜晴

一 はじめに

平成14年の奈良国立博物館で開催された第54回正倉院展は、東大寺大仏開眼会から1250年目にあたり、それに因んだ宝物が出陳される一方で、桑木阮咸（南倉125Ⅸ口絵1）や投壺（中倉170）（挿図1）、雲鳥飛仙背円鏡（北倉42-17）などの神仙思想をうかがわせる宝物も出陳された。これらの神仙思想を表した遺品については、それが中国製か日本製かの議論はあるものの、そのころに中国で流行していた神仙思想を背景に作成されたものであり、奈良時代の人々にも影響を与えていたことは確かなことと思われる。桑木阮咸はその捍撥絵に、碁盤に向かう二人の人物とその観戦者が表され、傍らには水瓶や投壺などが書き込まれ、隠者とみられる人々の様子が描かれている。投壺は壺の中に矢を投じて、その命中の仕方によって点数を競う遊技具で、この時出陳されたものには、長い頸部の両側に管状の耳が付随している。頸部の上段には瑞雲中の二頭の獅子、中段には山水中の高士、下段には宝相華唐草文帯を刻み、胴部には宝相華文帯を挟んで上下に花卉、瑞雲、飛鳥、含綬鳥、蝶などの文様を、高台には山岳文を精巧に線刻している。桑木阮咸の捍撥絵に描かれた水瓶には文様は表されていないものの、両耳が描かれており、唐代または奈良時代に、このような遊戯具が理想郷に住む隠者ないしは仙人たちが興ずるものとして、理解されていたと思われる。本稿では、桑木阮咸の捍撥絵に描かれた二人の人物像を中心に、当時の神仙世界像を瞥見し、正倉院宝物にみられる神仙思想の一端について触れてみたい。



挿図1 投壺（中倉170）

二 正倉院宝物の阮咸

正倉院の宝庫には、二面の阮咸が伝えられている。阮咸は円形の胴に棹（頸）が付く四弦の楽器で、一面は『国家珍宝帳』に記載された北倉の螺鈿紫檀阮咸（北倉30）（口絵2）である。



挿図2 螺鈿紫檀阮咸（北倉30）捍撥絵の書き起こし図

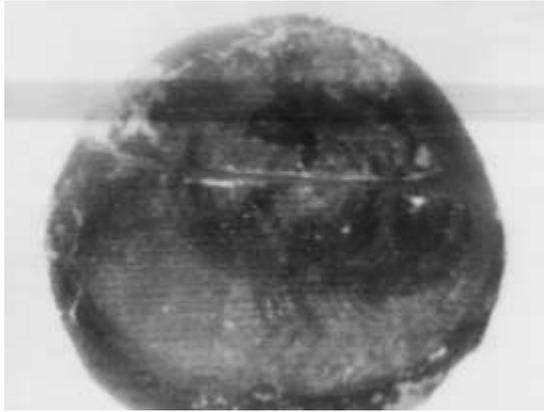
全長100.7cmで、円い捍撥部には阮咸を弾く女性一人と、それを囲む三人が描かれ（挿図2）、そのうちの一人は男装の女性ともみられ、四人の宮廷の女性を表した唐代の風俗画とされている。また裏面には玉を連ねた綬帯を銜えた鸚哥（ホンセイインコ属）が一对、花の周りを飛ぶ姿が螺鈿の手法によって華麗に表されている。

もう一面が南倉に伝えられた桑木阮咸で、全長は102.0cmあり、槽、頸、頭部はすべて蘇芳染めのクワ材、腹板の材はヤチダモともみられ、転手は紫檀製で、槽の中央部に「東大寺」の刻銘がある。腹板の縁には細い帯状のタイマイが、裏面には金箔を押して貼られ、中央には八花形の革製の捍撥、上部の左右にも革製の満月形が貼られている。

捍撥は地文様として白地に朱の纏網で三重に八弁花文を大きく描き、外周の花弁の隙間には緑青を塗り、その上に彩色と墨線で碁盤に向かう二人の老人像を中心とする神仙世界像が描かれる。その内容は岩が散在する野で、蔦葛が絡まる二本の老木の下、竹叢を背景にして縞模様のある獣皮に坐る二人の対局者とそれを見守る観戦者が表されている（挿図3）。向かって右側の人物は熊の毛皮とも見られる敷皮に坐り、白色の袍を身にまとい、白い巾で髪を包み、右手に碁石をつまんで、盤上をみつめている。向かって左側の人物は虎の毛皮に坐り、白



挿図3 桑木阮咸（南倉125 - 1）捍撥部分



挿図4 桑木阮咸(南倉125-1)満月形の日形(赤外線テレビ)



挿図5 桑木阮咸(南倉125-1)満月形の月形(赤外線テレビ)

い袍を身にまとい、さらに暗青色の裘(かわごろも)を背にかけた長い髯を生やし、黒い幘(さく)を被った老人で、一石を置こうとしている。二人の間で観戦する人物は、長い髯を垂らし白袍を纏い、左手を曲げてその上に頭を傾け、右手には如意を持っている。また向かって左の人物の前には、把手付きの水瓶が置かれ、もう一方の人物の背後には四本の矢が入り、両耳を備えた投壺が置かれている⁽¹⁾。

二個の満月形は革製で緑青を塗るが、肉眼では真黒にしか見えていない。ところが、平成2年の赤外線テレビを通した画像による調査によって、琵琶の響孔に擬せられた三日月を表し、残りの部分に日月の象徴であるカラスと蟾蜍が描かれていることが明らかになった⁽²⁾。日形には翼を広げた三本足のカラス(挿図4)が、月形には中央の木を挟んで、左に蛙、右に兎、木の



挿図6 深緑絁阮咸袋(南倉125-2)

根本には白が描かれていること(挿図5)が判明した。これらの日月を表した満月形は6世紀から10世紀にかけての中国や高句麗の塼刻画や壁画に表された図像にも共通している⁽³⁾。この阮咸の日月形は、腹板に貼られた捍撥絵とも天地の向きが一致するので、おそらく一連のものと思われる。古墳壁画などに描かれた日月形は、星宿と共に墓室の空間を設定する象徴として表されたとも考えられ、この阮咸の場合も捍撥絵に描かれた世界を設定するための象徴として置かれたものかも知れない。



挿図7 深緑絁阮咸袋(南倉125-2)口部内面の墨書銘

なお、この阮咸には、それを納めるための深緑絁阮咸袋(挿図6)が付随している。表面が深緑色の絁、内面が黄色の絁を袷仕立てにした長筒形の袋で、内外面ともに縦長の裂を底部で折り返して両側面で縫い合わせ、口部近くに表地と同じ裂の括り紐が付けられている。その口部の内面に「東大寺 納雜樂阮琴袋」の墨書銘(挿図7)がある。阮琴は阮咸の別称のようで、桑木阮



挿図8 竹林七賢、宋啓期博画 中国・南京市西善橋南朝博墓出土

咸に「東大寺」の刻銘のあることや法量から、その阮咸の袋とみて差し支えないようであり、同時に、この楽器の使用された時や場所を示唆する資料にもなっている。

三 桑木阮咸の捍撥絵

この捍撥絵に描かれた、竹林双樹の下の囲碁を囲む人々について、従来は高士⁽⁴⁾とか隠士⁽⁵⁾、隠者⁽⁶⁾あるいは単に老人⁽⁷⁾とされ、いずれも山中または樹下で囲碁を楽しむ、逸民ないしは仙人たちとみられ、その場所も世俗から離れた山中の竹叢の中などとされている。これらの人々や場所の性格を考えるにあたっては、この楽器が阮咸であり、その名称が西晋時代の竹林七賢の一人で、琵琶の名手、阮咸に因むといわれている。楽器の阮咸の名称は、先にあげた北倉の螺鈿紫檀阮咸が『国家珍宝帳』にも記されており、またこの種の楽器の姿は、中国・南京市西善橋南朝博墓⁽⁸⁾(挿図8)に表された竹林七賢の阮咸(挿図9)の人物像にもこのような楽器を演奏している姿が表されている。

なお、正倉院の宝物の中で、囲碁を囲む仙人(高士)の姿を表したものは、この阮咸のみであるが、これに類した構図を有する樹下の仙人(高士)たちを表した楽器としては、北倉に伝えられる金銀平文琴(北倉26)(口絵3)がある。これは桐製漆塗りの琴で、表、側、背の各面を金と銀の平文で飾っている。樹下の仙人(高士)たちを表している部分は、表面の頭部付近の金平文の方形枠(挿図10)内で、その中では樹下に三人の仙人



挿図10 金銀平文琴(北倉26)の金平文方形枠



挿図9 竹林七賢、栄啓期塼画 中国・南京市西善橋南朝塼墓出土

(高士)が現され、みな樹下の敷皮の上に坐し、一人は阮咸を弾じ、一人は琴を弾き、一人は角杯をかたむけている。その上方にも霊山に飛仙が、下方にも孔雀や鴛鴦、草花などが配されている。また枠の下方にも樹下の水辺に坐し遊樂する仙人(高士)が表されている。この琴の裏板の内側には「乙亥之年」などの墨書銘があり、これを唐の開元23年(735)にあて、この琴もその時の唐製の楽器とみられている。桑木の阮咸の捍撥絵に通ずるところがあり、その作成された年代を考える上にも参考になる。

さて、この捍撥絵に描かれた人物について、従来は高士、仙人、隠者、あるいは単に老人などとされ、その名前を特定するまでには至っていなかったが、菊竹淳一氏は南京西善橋南朝墓に表された竹林七賢と栄啓期の塼画との比較などから、その人物名の比定を試みられた⁽⁹⁾。それによれば、正面で顔をいくぶん左に傾けて目を盤面に落として観戦する人物は、右手に如意を握るところから、竹林七賢の中の王戎(挿図11)とみなし、向かって右の碁石を打とうとしている人物は母の死に臨んでも困碁に熱中した竹林七賢の一人の阮籍(挿図12)を表したものと推定している。そして向かって左の対局者は、肩から鹿の裘(かわごろも)を着けているので、『高士伝』に鹿の裘を付け索(なわ)の帯を締めていたと記す栄啓期(挿図13)とみなしている。また、金銀平文琴に表された三人の人物についても、正面の秦琵琶(阮咸)を奏するのが阮咸、向かって左で琴を弾ずるのは嵇康、右で角杯をかたむけるのは阮籍に当たると推定し、竹林の中で、音楽を愛し、酒を嗜むことにより、自然と芸術の調和した至高の境地を求めた竹



挿図11 竹林七賢、栄啓期塼画に表された王戎

林七賢の中の三人と推定している。桑木阮咸および金銀平文琴に表された人物のうち、南京西善橋塼墓に表われた人物の図像で、共通するのは如意を持つ王戎と、楽器の阮咸を奏する阮咸で、碁局を囲む人物は表されていない。それでは囲碁に熱中するのは、どのような人たちなのか、本稿では碁盤を挟んで対局する二人の人物像を中心に、別の角度から眺めて見たいと思う。

なお、中国、南京市の西善橋南朝塼墓について概要を述べる⁽¹⁰⁾。この古墓は南京市の南西、西善橋宮山の北麓に所在し、1960年に発掘された塼室墓で、墓室の総長は8.95m、幅3.1m、高さ3.3mで、天井はアーチ形をなしている。墓室の奥に位置する玄室の南北両壁面の中央部に、



挿図12 竹林七賢、宋啓期塼画に表された阮籍

それぞれ陽刻の塼を組み合わせた塼刻画があり、画面は長さ2.4m、高さ0.8mである。塼刻画の内容は、竹林七賢を題材とするもので、南壁では入口から奥に向かって嵇康、阮籍、山濤、王戎の四人が、北壁では入口から奥に向かって向秀、劉靈(伶)、阮咸および春秋時代の高士、宋啓期の四人が配されている。それぞれ樹木によって区分され、獣皮の敷物に坐し、やや斜め



挿図13 竹林七賢、宋啓期塼画に表された宋啓期

向きの姿をとり、各人物の名前が示されている。それぞれが生き生きと表現され、嵇康は髻を結び、両手で琴を弾じ、王戎は右手で几によりかかり、左手で如意を持ちその前には酒器が置かれている。また阮咸は秦琵琶(阮咸)を奏し、宋啓期も琴を弾するなど各自の象徴的な姿を表現している。年代については南朝の東晋から宋の期間、宋の後半、宋の後半から齊、宋・齊の間、齊、梁など諸説が提起されている⁽¹¹⁾が、一応南朝墓としておく。なお、南京の東方の丹陽県の胡橋宝山墓⁽¹²⁾と同県の建山金王陳墓⁽¹³⁾でも、ほぼ同様の竹林七賢と宋啓期を表した塼室墓が発見されている。

四 『搜神記』にみられる困碁の仙人

『搜神記』は中国、東晋時代の干宝が著した古今の説話、伝説、怪談類を集め、自身で見聞した同時代のものも付加した志怪小説集¹⁴⁾で、その中の管輅(かんろ)の条に、困碁に熱中する北斗星(北極老人)と南斗星(南極老人)の話が集録されている。著者の干宝は東晋時代の学者で、生没年は不明である。『晋書』によれば新蔡(河南省新蔡県)の人で、幼少のころから学問を愛して才器があり、長ずるに及んで著作郎となり、後に史官が置かれると、推薦されて国史の編纂に当たり『晋紀』を著している。搜神記は、干宝の身近に起こった二つの異変に感じて著したといわれている。一つは彼の家の父の寵愛を受けていた女中が、父の亡くなって埋葬される際に、母の嫉妬により一緒に生き埋めにされた。十数年後、母を父と合葬しようとした時に、その女中はまだ生きており、よく吉凶を言い当てたこと。もう一つは干宝の兄が病気になり、死亡した後、再び蘇生し、死んでいる間にみた天地の鬼神について述べ、自分が死んだとは知らなかったことが、同書を記した動機としている。『晋書』によれば、干宝は『搜神記』を書き上げた後、簡文帝(371~2)の時の相、劉惔に見せたところ、大いに感心されたと記されている。以上のことから、東晋時代の4世紀中ごろから後半にかけて『搜神記』が成立したものと考えられる。『搜神記』の現行本には二十巻本と八巻本とがあり、いずれも明代に刊行されている。二十巻本は胡震亨の輯本であり、八巻本は叢書『稗海』に収められているので、稗海本とも称される。いずれも後人の手が加えられたとみられるが、二十巻本の方が正系とされている。また勾道興本は敦煌文書の中から発見されたもので、唐代に流布していた『搜神記』の姿を伝えている。次にその二十巻本により、北斗星と南斗星について考えてみたい。

『搜神記』巻三、管輅の条には以下の記事がある。管輅平原に至り、顔超の貌の夭亡を主とするを見る。顔の父すなわち輅に命を延ばさんことを求む。輅曰く、「子帰らば清酒一榼(こう)鹿の脯(ふ)一斤を覓(もと)めよ。卯の日に、麦を刈る地の南、大桑の木の下に二人有りて棋を圍む次(とき)ただ酒を酌み、脯を置け。飲み尽さば更に斟み、飲み盡すを以って度となせ。もし汝に問わば、汝ただ之を拝し、言う勿れ。必ず合(まさ)に人あり、汝を救うべし」と。顔言に依りて往く。果たして二人の棋を圍むを見る。顔、脯を置き酒を前に斟む。その人戯を貪り、ただ酒を飲み脯を食らい顧みず。数巡するに、北辺に坐す者忽ち顔の在るを見て叱りて曰く、「何故に此ここに在りや」と。顔ただ之を拝す。南辺に坐る者語りて曰く「適来他の酒脯を飲む。なんぞ情無からんや」と。北に坐す者曰く、「文書すでに定まれり」と。南に坐す者曰く、「文書を借りて之を看ん」と。超の壽わずかに十九歳ばかりなり。すなわち筆を取り上に挑ね、語りて曰く、「汝を救いて九十年に至るまで活かしめたり」と。顔、拝して帰る。管、顔に語りて曰く、「大いに子の喜びを助け、かつは壽を増すをえたり。北辺に坐す人は是れ北斗、南辺に坐す人は是れ南斗なり。南斗は生を定め、北斗は死を定む。およそ人は胎を受け、皆南斗より北斗を過ぎる。祈求ある所は皆北斗に向かう」と。

この記事の意味は管輅という易断を得意とする占い師が、(山東省の)平原を通りかかった時に、顔超という少年をみて若死にの相があると判断した。顔の父が超の寿命を延ばして欲しい

と頼むと、輅は「家に帰って清酒一樽と鹿の乾肉一斤を買っておきなさい。そして卯の日に麦を刈る地の南に大きな桑の木があり、その下で囲碁をしている二人がいるので、そこへ少年が行き、酒を注ぎ、乾肉を置きなさい。飲んだらまた注ぎ、飲みつくすまで続けなさい。もし何か問われても、ただ頭を下げるだけで何も言っははいけない。そうすればきっと誰かが助けてくれるであろう」といった。顔超が言われたように行ってみると、果たして二人が囲碁に熱中していた。そこへ酒を注ぎ、乾肉を置いておいたが、二人は酒を飲み、肉を食らうだけであった。やがて北に坐っている方が顔を見て叱り付け、なぜここにいるのかと聞いた。顔は頭を下げていただけであったが、南に坐っている方が、適来（先ほどから）彼の酒と乾肉を飲食しているので、情をかけずにおれないと言った。すると北の方が文書で既に寿命が決まっていると言った。南の方が文書を借りて見てみると寿命が十九歳とあった。そこで南の方が筆で上下顛倒の記号をつけ、お前の寿命を九十歳にしてやったと言った。顔は頭を下げて、家に帰った。あとで管輅が顔超に言うには、北に坐っていた人は北斗星（北極老人）で、南に坐っていた人は南斗星（南極老人）である。南斗星は生を定め、北斗星は死を定める。人はすべて胎内に宿ってからは、南斗星から北斗星に向かって進む。だから願い事はすべて北斗星に向かってするのだと。

引用がやや長くなったが、卯の日に麦を刈る地の南に大きな桑があり、そこで北斗星（北極老人）と南斗星（南極老人）が囲碁をするということが語られている。ここに取り上げた『搜神記』の二十巻本は明代に編纂されたもので、かつてはその信憑性が議論されていたが、敦煌本の出現により唐時代に流布していたものを基本にした可能性が指摘されている。それにより、ここにあげた物語も唐時代ころに広く知られていた可能性がある。

五 捍撥絵に描かれた人物とその背景

現行の『搜神記』が唐時代の面影をしのびうるとすると、同時代の正倉院宝物の桑木阮咸の捍撥絵と、この物語との比較が可能になる。『搜神記』では囲碁をしている場所が大きな桑の木の下であるが、捍撥絵の背景は蔦葛が絡まる老松と竹藪である。しかしこの楽器の阮咸の槽の材料が桑であることが、それと同じ意味を示唆するとも考えられる。『搜神記』に記された顔超という少年が会った北斗星と南斗星の二老人の姿や衣服、持ち物などの特徴については、とくに記されず、ただ囲碁に熱中していることしか書かれていない。従って、この絵に描かれている囲碁で対局している二人を、直ちにこの二老人と速断することはできないかも知れない。しかし、向かって右側の老人は白色の袍を身にまとい、丹地に朱の隅を入れた外被をはおっている。一方、左側の老人は袖を緑色に塗った白色の袍をまとい、暗青色の群青を塗った裘を背にかけている。このことは右側の老人の外被の朱色が南方を表し、左側の老人の裘の暗青色が北方を表しているとすれば、前者を南斗星（南極老人）、後者を北斗星（北極老人）とみなすことが可能になるとおもわれる（挿図14）。

なお、向かって左側の老人の膝の横に把手付きの水瓶が、一口置かれている。これは『搜神

記』の管輅の物語にもみられるように、酒器とみられる。この他にも、老人（逸民、仙人、高士）たちが樹下で碁局を囲んだり、あるいは楽器を演奏する場面などで、酒器の置かれていることがある。この他に正倉院宝物で、開元23年（735）と推定されている金銀平文琴の方形の枠内に表された、樹下の三仙人の場面にも把手付き水瓶や壺、杯と勺、角杯などがみられる。中国の出土品では、河南省洛陽市16工区76号唐墓出土の螺鈿鏡¹⁵にも把手付きの壺（水瓶）やカットグラスとみられる杯なども表されている。また南京市西善橋南朝塋墓の竹林七賢と嵇啓期を表したもののうち阮籍、山濤、王戎、劉伶の場面にもそれぞれ酒器が置かれている。樹下で高士たちが碁碁を嗜んだり、それを観戦する時、また楽器を演奏し、それを聴く時には酒を飲みながら行うのが一般的であったようである。『搜神記』の顔超の場合には酒を一榼献上しているが、捍撥絵にも水瓶が一口置かれている。

この捍撥絵の背景には松と竹叢が描かれている。松は左右に枝をひろげる老松で、幹や枝はくねくねと曲がり、両木ともに蔦葛が纏わり、上方の松の葉叢の先から長い蔦葛の葉が垂れ、風に揺れる風情を巧みに表現している。また松の木の上方では両者が近接する松叢の間に二本の蔦葛が繋がり、アーチ形の門のような形を呈している（挿図15）。さて、絹の主産地であった中国では、古くから桑の木が信仰対象の聖樹とされ、また葉が桑の木に似た扶桑の木も神木と



挿図14 桑木阮咸（南倉125 - 1）捍撥部分拡大図



挿図15 桑木阮咸(南倉125-1)捍撥絵の書き起こし図

して崇められてきた。扶桑の木は太陽が出る東海の中にあり、両樹同根、すなわち二株同根で連理木ともいわれる。漢代の画像石には、この扶桑の木がしばしば浮き彫りであらわされている。山東省微山県両城鎮出土画像石¹⁶⁾(挿図16)などは、その典型的な例で一つの根から二つの樹幹が分かれ、上方で両方の枝葉が再び繋がっている。

『搜神記』に記された北斗星、南斗星の二仙人は桑の木の下で囲碁に興じているが、これも桑や扶桑の聖樹信仰が根底にあると思われる。阮咸の捍撥絵に表された木は蔦葛が絡まる老松であるが、瑞樹として扶桑

が松に替わり、さらに枝葉が一体になる代わりに、蔦葛が両木を結びつけたものとみられる。

さて、この捍撥絵の地文様は、白地に朱の縷網で彩色した八花形の蓮弁文様が描かれている。周縁は花卉の先端をそれぞれ柔らかく折り返して、隅の丸い八花形に作り、八葉の花形をその



挿図16 山東省微山県両城鎮出土画像石

中へ一杯に納め、外周の花弁の隙間には鮮やかな緑青を塗っている。地文様の花弁は三重の複合花弁で、小さな白地のままの中房を中心に、内側の小花弁の周縁には数本ずつ赤い蕊が巡らされている。また各花弁は自由な筆使いで数段の濃淡に塗り分け、明るい部分は下地の白塗りのままに残し、次第に丹と朱を塗り重ねて色隈を作っている。また花弁の輪郭や弁端の折り返し部は濃墨の細線で明瞭に描き起こしている⁽¹⁷⁾(既出挿図14)。ところで『淮南子』巻四墜形訓には「扶木は東方の陽州にあり、常に日が照っている。建木は南の都広山にあり、諸帝はそこから天に昇り降りをする。(中略)そこは天地の中心である。建木の西方に若木があり、梢には輪の太陽がかかり、蓮華のような形をして下土を照光する」とあり、扶木、建木、若木はいずれも太陽の宿る世界樹で、太陽は蓮華状に近いものであることを示している⁽¹⁸⁾。淮南子は漢代の書物であるが、捍撥絵に描かれた鳶葛の絡まる松が扶桑の木の系譜を引くものであるとすれば、この絵の下地になっている蓮華の花は、太陽の姿と関連する可能性が出てくる。囲碁を観戦している中央の人物の頭部は蓮弁の中央にある中房の前に置かれ、この捍撥絵の中心に位置している。この人物名を特定することは困難であるが、左右の人物が北方と南方の方位に関連するとすれば、中央は東方に当たり、太陽の昇る方向と一致することになる。

六 むすび

以上、桑木阮咸の捍撥絵に描かれた碁盤を囲んで対局する人物とそれを観戦する人物を中心に、その背景の老木と竹叢およびその地文様に当たる蓮弁について検討してきた。三人の人物については、従来は高士、仙人、逸民などとされ、人物名は特定されていなかったが、この楽器が阮咸であることもあり、竹林七賢などと結びつけてその中の人物に当てはめようとする試みがなされてきた。本稿では、中国古代の文献から、地文様の蓮弁が東から昇る太陽の象徴を意味し、背景の鳶葛のからむ老松は桑の木と関連深い扶桑の木の系譜を引くものであると推定した。この絵の背景にそのような意味があれば、碁盤を挟んで対局する二人は、二人の衣服の色のうち、一方の朱色が南を、他の一方の暗青色が北を意味するとして、北斗星(北極老人)と南斗星(南極老人)に対比できると思われる。ただし、北斗星と南斗星の二老人が囲碁に熱中する話は、『搜神記』の管輅の条からしか引用しなかったため、他にこれに類する話を検討する必要があり、まだ課題を残している。なお、北斗にたいしての信仰は中国において古くからみられ、それが天界と人間界と密接な関連があるとする天人感応説などになり、次第に広く中国社会へ浸透していったようである。また北斗信仰は北斗七星に対する信仰であるが、それに関連した記載のある道教経典のほとんどが、北斗を人間の生命をつかさどる司命神としてあげており、発生の始めからその性格を強く持っていたようである⁽¹⁹⁾。囲碁を観戦する如意を持つ人物については、今回明らかにできなかった。東方に関する人物とも思われるが、今後検討して行きたい。

注

- (1) 宮内庁正倉院事務所『正倉院の絵画』日本経済新聞社 1968年
 - (2) 『正倉院年報』第14号口絵 1992年
 - (3) 西川明彦「日像・月像の変遷」(『正倉院年報』第16号)1994年
 - (4) 注1に同じ。
 - (5) 宮内庁正倉院事務所『正倉院宝物 南倉』毎日新聞社 1996年
 - (6) 『第54回正倉院展目録』奈良国立博物館 2002年
 - (7) 宮内庁正倉院事務所『正倉院宝物 南倉』朝日新聞社 1989年
 - (8) 南京博物院・南京市文物保管委員会(羅宗真)「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁画」(『文物』1960年8・9期)1960年、姚遷・古兵編『六朝芸術』文物出版社1981年、南京博物院編『中国の博物館 第4巻 南京博物院』講談社 1982年など
 - (9) 菊竹淳一「瑞祥と隠遁の図像 天平時代絵画の系譜」(『日本美術全集 第3巻 正倉院と上代絵画』講談社 1992年
 - (10) 注8に同じ。
 - (11) 謝振發「六朝絵画における南京・西善橋墓出土「竹林七賢磚画」の史的位罫」(『京都美学美術史学』第2号)2003年
 - (12) 注8『六朝芸術』に同じ。
 - (13) 注8『六朝芸術』に同じ。
 - (14) 竹田晃訳『搜神記』(東洋文庫10)平凡社 1964年
 - (15) 『世界美術大全集 東洋編 第4巻』図205 小学館 1982年
 - (16) 近江昌司「館蔵「扶桑図磚」について」(『天理参考館報』第2号)1989年、『中国美術全集 絵画編 18 画像石画像磚』上海人民美術出版社 1988年など
 - (17) 注1に同じ。
 - (18) 注16、近江論文に同じ。また蓮華形に表された太陽の例は、林巳奈夫「中国古代における蓮の花の象徴」(『東方学報』京都 第59冊)1987年に詳しい。
 - (19) 遊佐昇「道教と文学」(『道教2 道教の展開』平河出版社 1983年
- (付記) 本稿は第54回正倉院展公開講座(2002年10月)で発表した「正倉院宝物にみる神仙世界 天平人の桃源郷」に、加筆、修正したものである。なお、『搜神記』と『淮南子』の引用箇所については、松尾良樹奈良女子大学教授の御教示をいただいた。

(奈良国立博物館上級研究員)